

第3節 山田郡周辺の古代寺院 一前田東・中村遺跡出土瓦と関連して一

（1）はじめに

讃岐は瀬戸内海から阿讚山脈に至るまでの平野で大部分を占めており、古来から人々が生活を営んでいた地域である。律令国家の成立とともに国家レベルで取り入れられた仏教の広まりとともに、その象徴ともいいくべき寺院が飛鳥寺の建立以後急激に広まった。当初は畿内中心部に限られていた寺院も7世紀中頃以後全国に広がり、741年の国分寺建立の詔によって開始された各國の国分寺の建立と奈良・東大寺の建立をもって寺院の造営はピークを迎えた。このような状況下で讃岐でも白鳳時代以後多くの寺院が建立され奈良時代までに30を越える寺院が建立されている。さらに律令国家により交通路が整備され、その一つの南海道が讃岐を通過しており律令体制が浸透した地域とも言えよう。

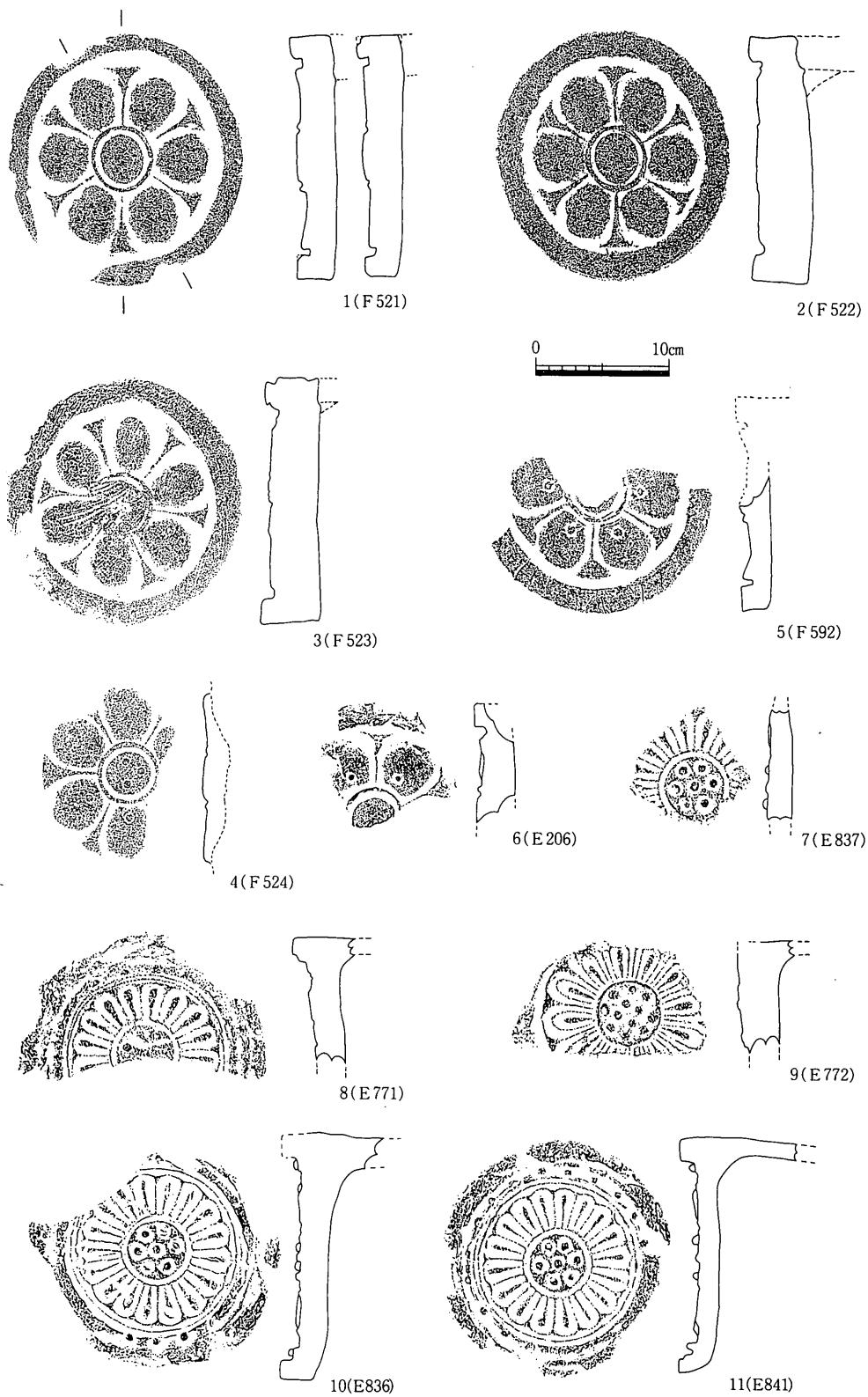
このような中で前田東・中村遺跡も7～10世紀にかけての古代に栄えた遺跡の一つである。前田東・中村遺跡は山田郡と三木郡の郡境に位置し、遺跡のすぐ南側の芳岡山が郡境の目標とされている。時期的には異なるがこの山田郡に5箇所、三木郡に3箇所の寺院が建立されており、讃岐の中で面積的に狭い両郡に讃岐全体の約四分の一にあたる寺院が集中していることから、前田東・中村遺跡の位置する周辺地域は7～8世紀には特に栄えていた場所の一つと言えよう。そして7～8世紀の軒丸瓦・軒平瓦を含む瓦が出土していることからも、明確な遺構は検出出来なかったが寺院か役所のような公的施設が付近にあったことが予想されている。本論ではこの前田東・中村遺跡で出土した瓦の分析と周辺地域の古代寺院との関係を中心に考えてみたい。尚、本論で古代寺院と言う時には7～8世紀の寺院を指している。

（2）前田東・中村遺跡出土の軒丸瓦とその系譜

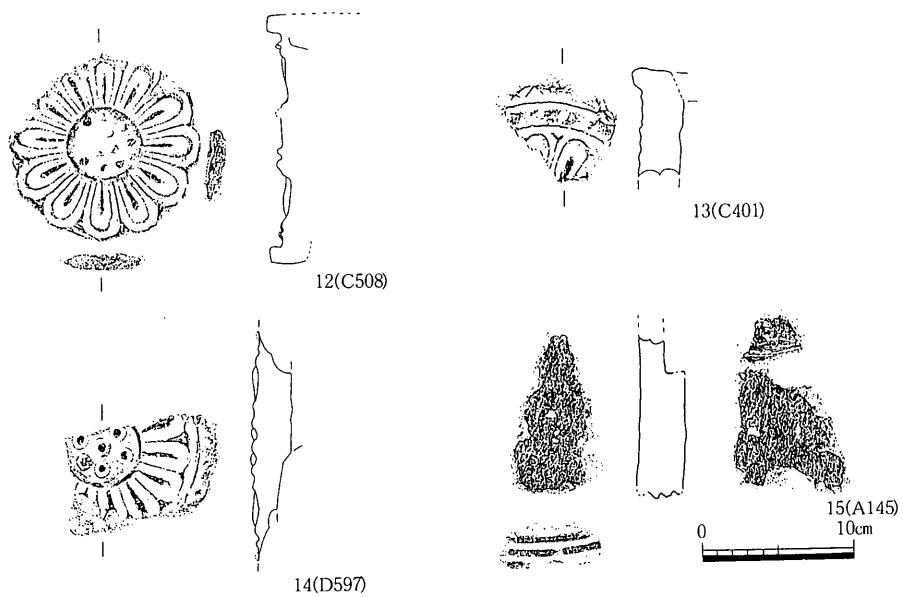
前田東・中村遺跡では瓦当文様の分かる軒丸瓦が14個体出土している（第808・809図）。これらの軒丸瓦はI類：素縁単弁軒丸瓦（1～6）、II類：細弁単弁軒丸瓦（7、8、10、11、14）、III類：子葉をもつ細弁単弁軒丸瓦（9、12）の3種類に大別出来る。ここではそれぞれの類ごとに特徴や系譜などについて検討を加えてゆく。

I類：素縁単弁軒丸瓦（第808図 1～6）

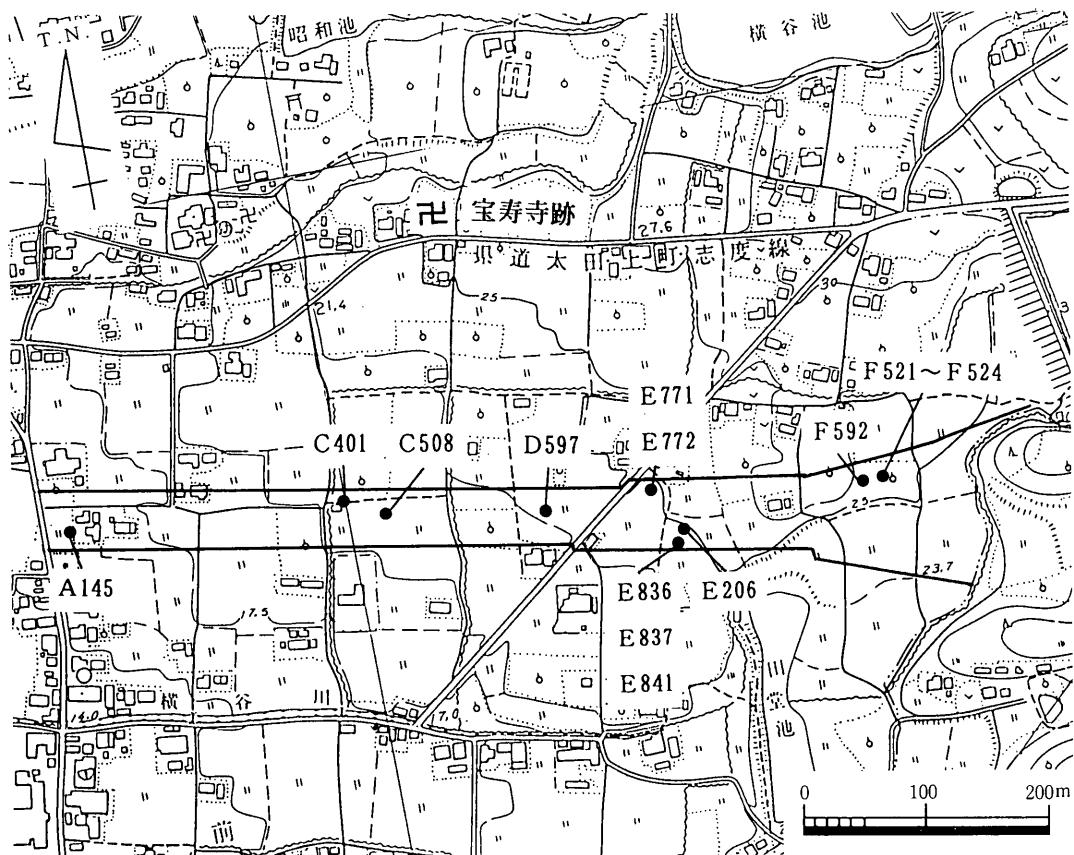
この瓦の特徴は単弁の大きく肉厚の6弁の蓮弁、中房の周囲の圈線、外区は素縁である



第808図 前田東・中村遺跡出土軒丸瓦 (1/5)



第809図 前田東・中村遺跡出土軒丸瓦・軒平瓦 (1/5)



第810図 前田東・中村遺跡軒丸瓦・軒平瓦出土位置図

ことである。さらに蓮弁内の下部に珠文を配するもの（4～6）がある。ここで蓮弁内に珠文を配しないもの（1～3）をI-a類、蓮弁内に珠文を配するもの（4～6）をI-b類とする。I類の瓦当の直径は16.8～17.6cmで、中房の直径は3.4cm前後である。蓮弁は6弁で子弁は持たない。蓮弁の最大幅はI-a類が3.3cm、I-b類が3.6～3.7cmでI-b類のほうが若干幅広の蓮弁となっている。蓮弁の先端は反転は緩く、I-aは丸みを帯びているが、I-b類は尖り気味となっている。両者とも先端の反りは緩くなっている。中房の蓮子はI-a類のものには認められないが、I-b類には4個配されている。しかし蓮子は潰れたり剥落しており確認しにくい状況となっている。中房の周囲の圈線は幅2～3mmで、中房に直接は接していない。丸瓦部との接続部は上部で外区の直下に位置している。接合方法は基本的に瓦当裏面に丸瓦を押し当て、接合用粘土を瓦当裏面と丸瓦の凹面の接合部分に充填して接合するものと思われる。（2）の軒丸瓦で接合部にかきべらによる刻み目が認められ、接合しやすいようにしている。

I類の瓦はその特徴から百濟系の瓦と考えられる。扶余の軍守里廃寺出土の軒丸瓦に全体的に似ており、軍守里廃寺のものには中房の周囲を圈線状に粘土紐を貼り巡らすものがある。⁽¹⁾前田東・中村遺跡出土のものは蓮弁の先端に切り込みはないが、蓮弁の幅や先端の形状は軍守里廃寺のものにも酷似するものがある。国内出土のものとしては中房の蓮子の数などに差異はあるが瓦当文だけでみれば、福井県武生市大虫廃寺、⁽²⁾愛知県小牧市大山廃寺⁽³⁾（33）、愛知県稻沢市東畑廃寺⁽⁴⁾（30）、名古屋市尾張元興寺、⁽⁵⁾播磨・高丘7号窯⁽⁶⁾などに類例がある。

さらに高松市前田東町で、前田東・中村遺跡のC区とD区の境の北200mのところに塔と考えられている礎石を残す宝寿寺の瓦がある。宝寿寺出土の軒丸瓦（16～19）には単弁6弁軒丸瓦（16、18）、単弁7弁軒丸瓦（19）があり、その他に四重弧文軒平瓦（17）がある。このうち（16）は素縁で肉厚の蓮弁の形状や中房の周囲に圈線が巡るなど前田東・中村遺跡出土のI-a類と同文となっている。また（18）は（16）の特徴に加えて蓮弁内に珠文をもつもので、これは前田東・中村遺跡出土のI-b類と同文となっている。これに対して（19）は7弁となっており外区は素縁で蓮弁の先端は尖っている。中房の蓮子は1+4で周囲に圈線は認められない。しかし蓮弁は子葉をもたない素弁で、幅広で肉厚な蓮弁の形状は百濟系のものと考えられ、前田東・中村遺跡のI類の瓦に近いものである。

次に蓮弁の中に珠文をもつものを見てゆくと、飛鳥寺、法隆寺、奥山久米寺、四天王寺などの初期の瓦では蓮弁の先端部に珠文が配されるものが多い。しかし前田東・中村遺跡

I – b 類のように蓮弁内の下部に珠文が配されるものとしては、奈良県大窪寺⁽⁷⁾、京都府広隆寺⁽⁸⁾（27～29）、愛知県東畠廃寺⁽⁴⁾（31・32）、香川県讃岐国分寺⁽⁹⁾（40）の例があるにすぎない。広隆寺では蓮弁を凸線で表し、弁端が丸みを帯びた剣先状になっている単弁8弁軒丸瓦の蓮弁内の中央部に珠文が配されている。7世紀中頃と考えられている。東畠廃寺では素縁素弁蓮華文軒丸瓦でI – E 類と分類されている瓦の蓮弁内のほぼ中央部に珠文が配されている。蓮弁は9弁で幅は2.5cm、中房の蓮子は1+4となっている。7世紀後半と考えられており、前田東・中村遺跡のものと同時期である。讃岐国分寺では、国分寺造営以前のものと考えられる外区が素縁の軒丸瓦がある。この中に単弁10弁軒丸瓦で蓮弁内の中央付近に珠文を配するもの（40）がある。国分寺造営時に他の寺院から転用したものと考えられる。

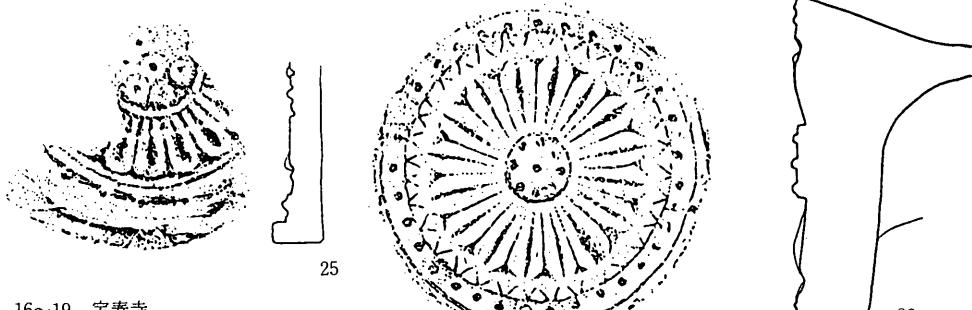
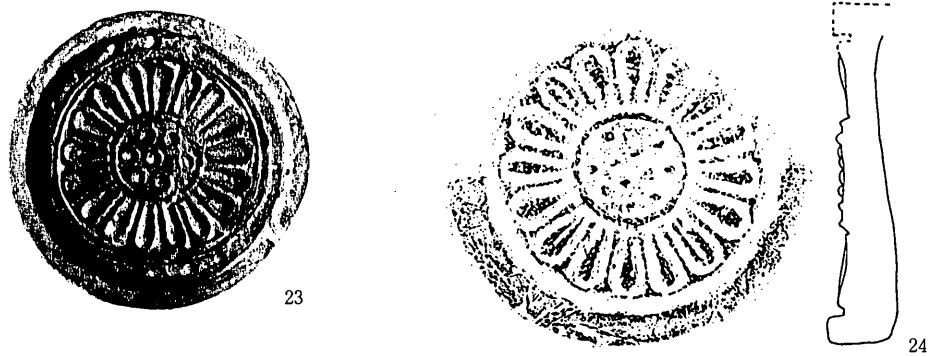
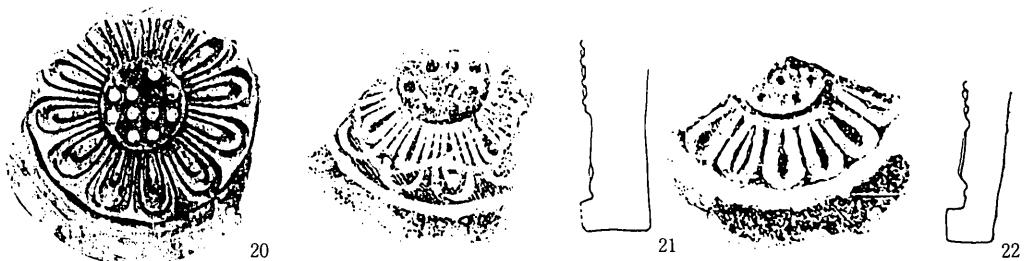
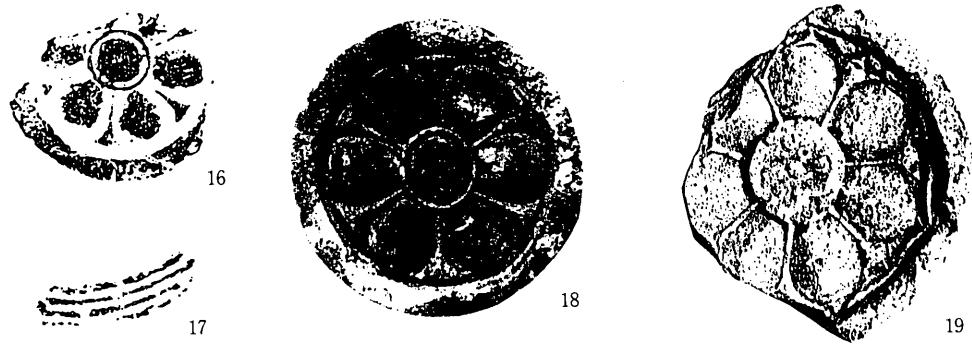
前田東・中村遺跡のI 類は百濟系の瓦で、共伴遺物から7世紀後半と考えた。弁数は6弁で瓦当も厚めとやや退化傾向にあるとも言えるが、蓮弁内に珠文を配する他の例とも年代差はほとんどなく妥当な年代と言えよう。

II 類：細弁単弁軒丸瓦（第808図 7, 8, 10, 11, 第809図 14）

II 類の瓦は、外区は外縁と内縁に分かれ外縁は素縁、内縁には珠文を配している。蓮弁は幅が1.0～1.5cmの細弁で弁数は17弁となっている。間弁の上部は横のものと接している。中房の周囲に凹線を巡らせ中房の蓮子は1+6である。II 類の瓦当の直径は16.7～18.4cm、中房の直径は4.4cmである。丸瓦部との接合は接合用粘土を貼り付けて行っている。蓮弁数は（10・11）は確実に17弁である。蓮弁が17弁と変則的なもので分割配置ではないため、（7・8）のような瓦当面が完全に残っていないものは16弁になる可能性もあるが、一応瓦当の文様構成が同じであることから、17弁としておく。また（14）は反転復元すると14弁になる。

細弁様式の軒丸瓦は、素弁の変形・単弁の弁数の増加・複弁の二分割によるものが考えられている。複弁のものは基本的に子葉をもつため、子葉を持たない素弁のII 類は素弁の変形と考えられる。中房の蓮子の数が異なるが奈良県横井廃寺⁽⁷⁾のものに似ている。

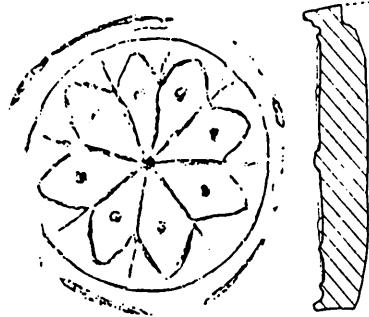
II 類の軒丸瓦の年代であるが前田東・中村遺跡では包含層から出土したため共伴遺物からの年代決定は出来なかったため、型式学的方法に依らざるを得ない。II 類の軒丸瓦は外区が内縁と外縁に分かれており、外区がこのように分かれるのは7世紀末の本薬師寺以降である。II 類の外区外縁は素縁で、一般的に外区外縁に鋸歯文が施されるものより先行す



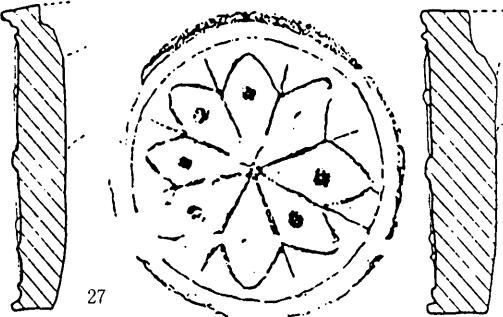
16~19 宝寿寺
20~26 始覺寺

16~19・20・23は縮尺任意、他は1/4

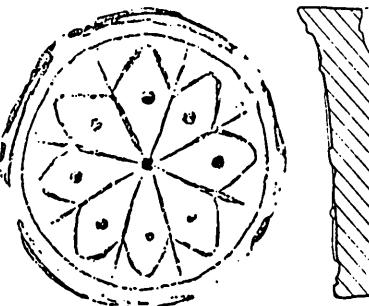
第811図 香川県内出土軒丸瓦・軒平瓦 (1) (1/4)



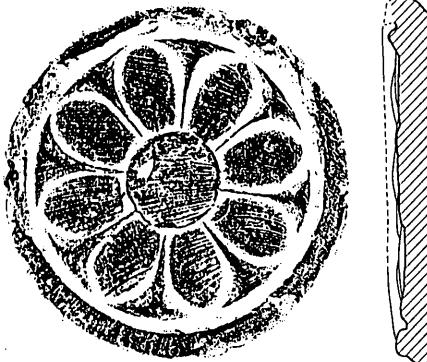
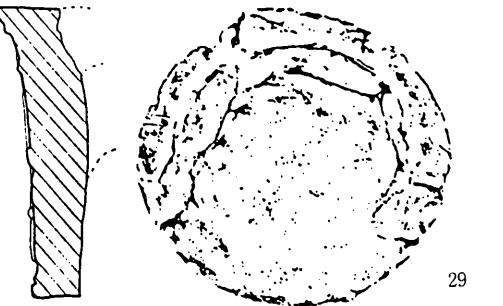
27



28



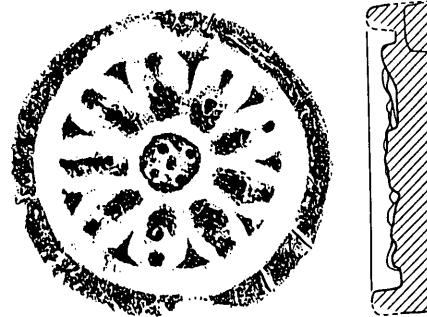
29



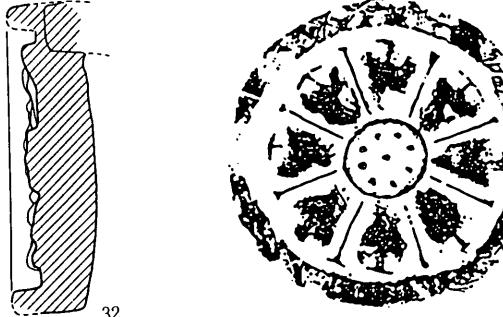
30



31



32

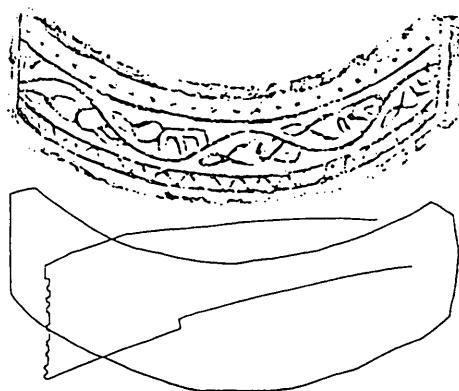


33

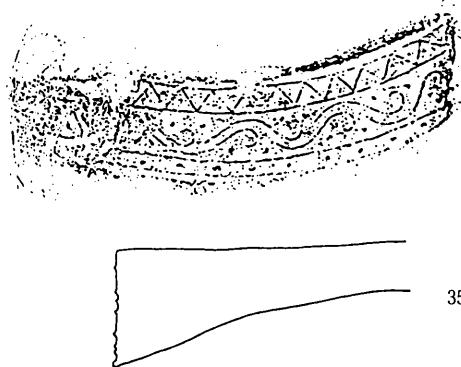
27~29 広隆寺
30~32 東畠庵寺
33 大山廃寺



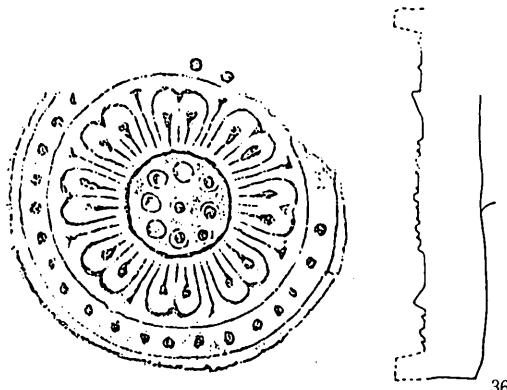
第812図 各地出土軒丸瓦 (1/4)



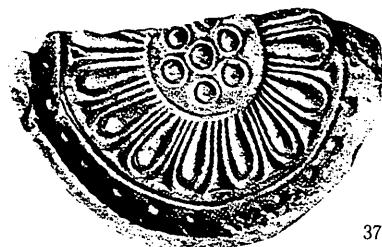
34



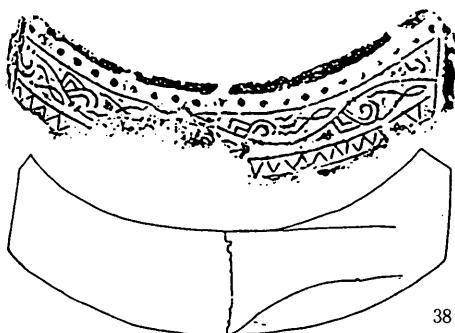
35



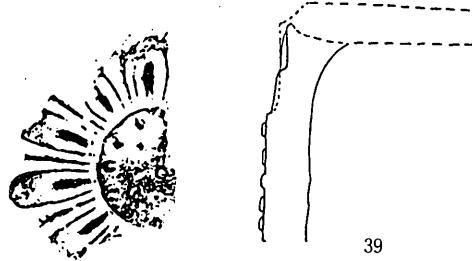
36



37



38



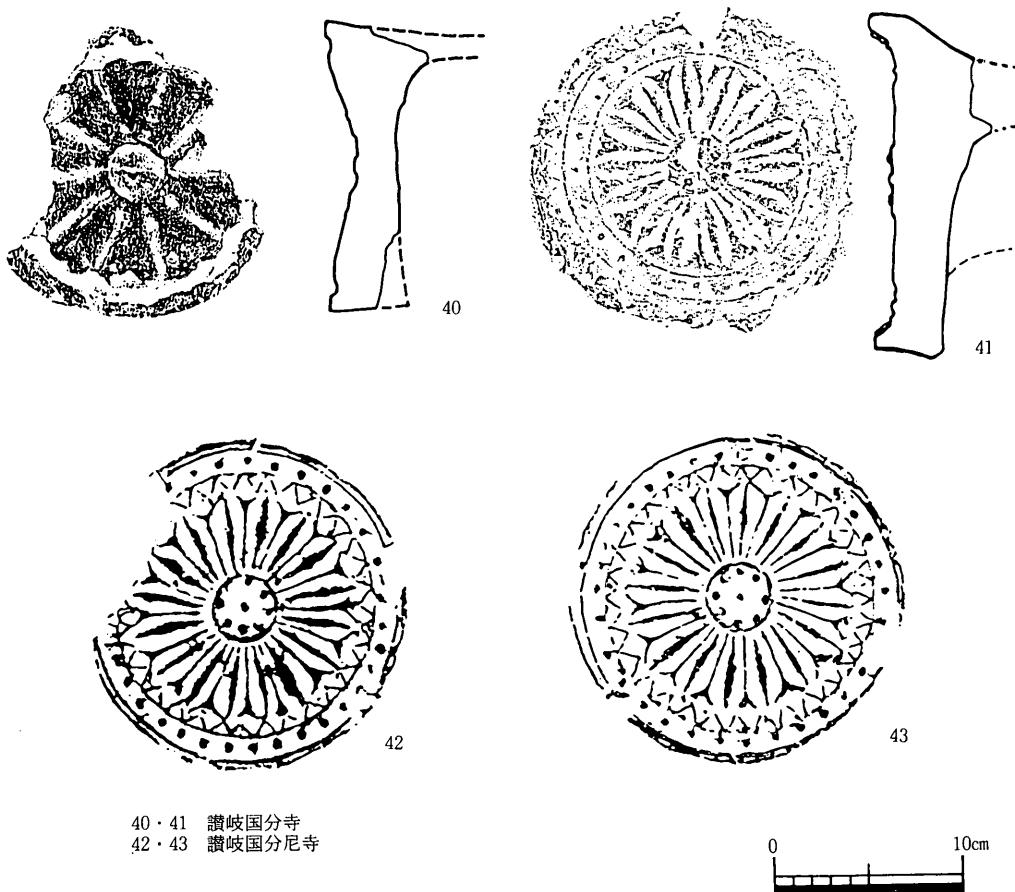
39



34・35 始覚寺
36・38 長樂寺
37 願興寺
39 上高岡廃寺

37のみ縮尺任意

第813図 香川県内出土軒丸瓦・軒平瓦 (2) (1/4)



第814図 香川県内出土軒丸瓦

る要素をもっている。今ここで香川県三木町に注目される古代寺院がある。始覚寺がそれで、出土軒丸瓦の中に細弁単弁17弁で前田東・中村遺跡出土のものと全く同文の完形品が1点ある。その他に文様構成が同じで18弁とされているものが2点あるが、瓦当の半分以下しか残っていないため復元方法によっては17弁になる可能性もある。始覚寺では藤原宮式の偏行唐草文軒平瓦(34)が出土している。他に讃岐国分尼寺と同文、同系統の軒丸瓦(26)が出土している。このことから始覚寺の年代は軒平瓦から藤原宮以降、軒丸瓦からは国分寺建立の詔(741年)⁽¹⁰⁾以降とされている。さらに香川県長尾町願興寺出土の軒丸瓦(37)は細弁単弁16弁で、中房の形状や蓮子の数はⅡ類と同じで、蓮弁の大きさや形状は後述するⅢ類と同じとなっている。この願興寺出土の軒丸瓦は藤原宮式の亞型式とされている香川県三木町長樂寺の複弁軒丸瓦(36)⁽¹²⁾の文様を二分割したものである。以上のこと

からⅡ類の軒丸瓦は始覚寺の軒平瓦と組み合わさる可能性が高い。従って7世紀末～8世紀初頭と考えたい。

Ⅲ類：子葉をもつ細弁单弁軒丸瓦（第808図 9, 第809図 12）

2点のみで内区全体と外区の一部が残っているものである。蓮弁は单弁の12弁で幅1.6cmの細弁であるが、蓮弁の中に子葉をもつものである。子葉の形態はⅡ類の蓮弁に似ている。中房の直径は4.8cmほどで蓮子は4+8で2類より多くなっている。外区は素縁で分かれていらない。丸瓦部との接合方法であるが特殊な方法を用いているものがある。（9）の軒丸瓦は外区部分が大部分剥離した内区部分の瓦当であるが、この内区部分の外側の剥離した部分に布目压痕が残っている。このことは瓦当の内区部分のみを別に製作していることを示している。そして粘土円筒の中に内区部分をはめ込み、粘土円筒の端部をそのまま外区部分に転用しているものと考えられる。最後に円筒部を半截して丸瓦部とするのであろう。Ⅲ類は12弁であり複弁6弁の分割形態の可能性もあるが、複弁で6弁のものは少ないので单弁の一形態と考えるほうが自然であろう。

Ⅲ類の瓦当文様の類例であるが、先述した始覚寺で出土している。また願興寺では中房の形態はⅡ類で蓮弁は16弁であるがⅢ類というものが出土している。Ⅲ類は外区が分かれていらず古い要素をもっている。しかし地方の軒丸瓦は時代が下っても外区が分かれないものもあるのでこのことだけでは即断出来ない。始覚寺では先述したように藤原宮式の偏行唐草文軒平瓦が出土している。従ってⅢ類もⅡ類とほぼ同時期と考えられるがやや先行する可能性もある。

（3）前田東・中村遺跡と周辺の古代寺院

前田東・中村遺跡の南側約800mのところにある芳岡山を境に東側が三木郡、西側が山田郡となっている。この芳岡山から北側に山田郡の条里制地割りの方向のN-10°-Eのラインを引くと、前田東・中村遺跡のA～E区までは山田郡に入る。しかし芳岡山から北東方向に派生し前田東・中村遺跡のG区のすぐ東に至る丘陵部があるが、この自然の山並みを郡境とすると前田東・中村遺跡はすべて山田郡に入る。ここでは前田東・中村遺跡は山田郡内の遺跡として扱うこととする。

最初に述べたように、山田郡に5つ、三木郡に3つの古代寺院がある。山田郡では白鳳時代のものに下司廃寺、宝寿寺が、奈良時代のものに高野廃寺、拝師廃寺、山下廃寺があ



第815図 前田東・中村遺跡周辺の古代寺院分布図

る。これに対し三木郡には白鳳時代の上高岡廃寺、長楽寺廃寺、白鳳～奈良時代の始覚寺がある。前田東・中村遺跡出土の軒丸瓦の分析でⅠ類が宝寿寺から、Ⅱ・Ⅲ類が始覚寺から出土していることが判明した。

⁽¹³⁾ 宝寿寺は前田東・中村遺跡のC区とD区の境部分の北側約200mの所に土壇と礎石が数個残っている。小字名は堂床と呼ばれているが、塔の跡ではないかと思われ、伽藍配置等は不明である。宝寿寺と同文のものが前田東・中村遺跡ではF区から出土している。宝寿寺出土の軒丸瓦は前田東・中村遺跡Ⅰ類のものと同様に百濟系のものと考えられる。また前田東・中村遺跡のA2区から四重弧文軒平瓦(15)が1点出土しているが、これがⅠ類の軒丸瓦と組み合わさるものと思われる。宝寿寺の塔と考えられている所から北西600mのところの低い丘陵部に滝本神社古墳がある。この古墳は7世紀前半のものとされており、特徴的な石室をもっている。石室は横長の長方形で長辺のほぼ中央に羨道がつき、平面形

がT字形となっている。滋賀県大津市近郊には渡来系氏族の古墳と考えられている、石室の平面形態が正方形となる古墳が多くある。⁽¹⁵⁾もし滝本神社古墳の石室がこのような平面が正方形の石室の一形態とすれば、渡来系の人物の古墳と言える。そうすると前田東・中村遺跡周辺にいた渡来系の氏族が滝本神社古墳を作り、さらに百濟系軒丸瓦を葺いた宝寿寺を造営した可能性がある。前田東・中村遺跡のI-b類の蓮弁内に珠文を配するものが宝寿寺でも出土している。この蓮弁内に珠文を配する軒丸瓦は京都市広隆寺で出土していることはすでに述べたが、この広隆寺は京都市の太秦に所在し、代表的な渡来系氏族である秦氏の氏寺であることは非常に興味深い。讃岐國では香川郡、山田郡、三木郡を中心に秦氏が多く、全国的にみてもその数は非常に多い。このことから山田郡の東端の地に百濟系の瓦をもつ宝寿寺が造営されたことも不思議ではない。

始覚寺は立石山から南へ派生する丘陵の東側の男井間池の東に位置する。前田東・中村遺跡とはこの丘陵部を挟んで東西にあたり、直線距離で1.5cmほどである。伽藍配置は不明であるが寺域は現在の始覚寺より西側に考えられている。現在の始覚寺には移動された塔の心礎石がある。心礎石は二重の舍利孔が穿たれた花崗岩製のものである。この始覚寺から前田東・中村遺跡のII類とIII類のものと同文の軒丸瓦が出土している。始覚寺からは軒丸瓦と軒平瓦が出土している。しかし軒丸瓦のなかで讃岐国分尼寺出土のもの⁽¹⁶⁾(42・43)と同文のもの(26)があり、この軒丸瓦が注目され奈良時代後半という年代が先行していた。しかし軒平瓦は藤原宮式のものがあり(34)この年代差を疑問視するが多く、始覚寺の年代が白鳳時代か奈良時代か曖昧にされていたのである。だがこの時期差は創建時のものと葺き替えのものという時期差にあてれば問題はない。そしてこの軒平瓦に対応する軒丸瓦が前田東・中村遺跡のII類とIII類に相当するものと言え、その年代は先に検討したように8世紀前後と考えられる。

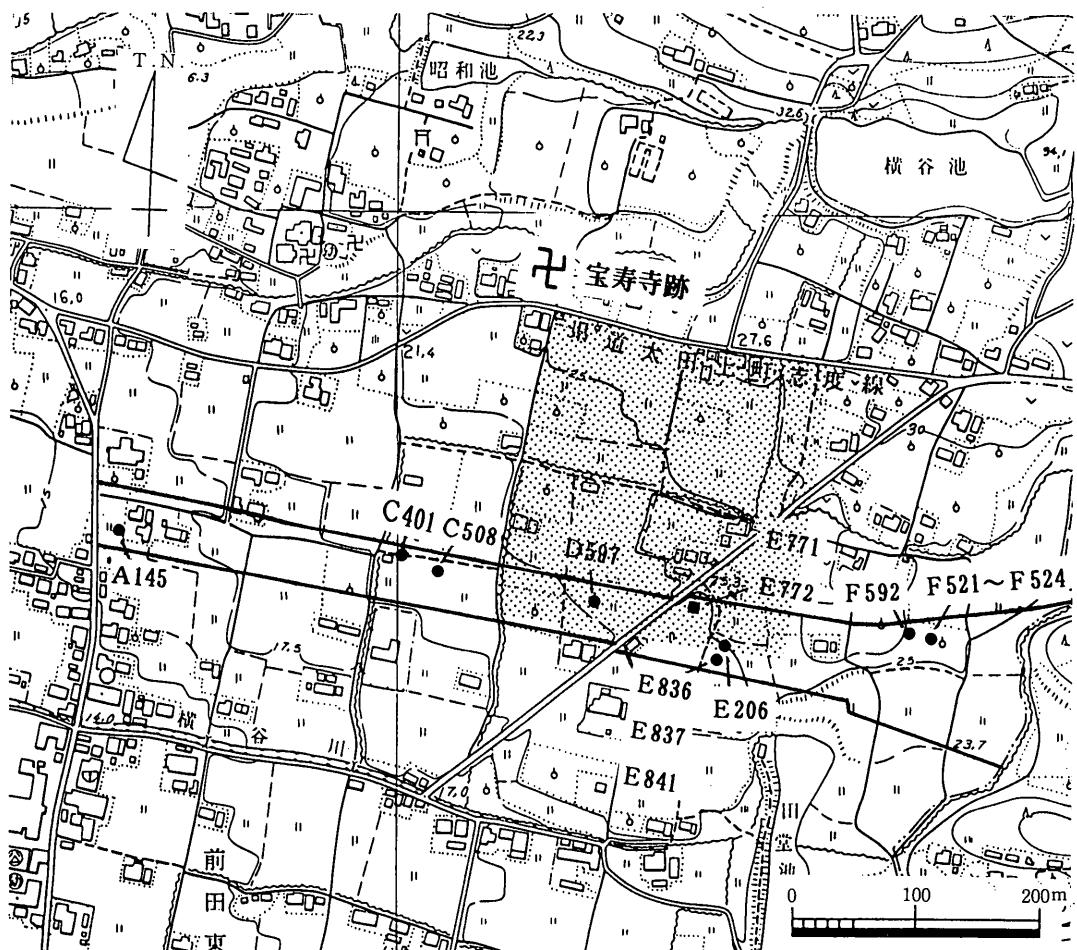
前田東・中村遺跡は山田郡の宮廻郷に位置する。造東大寺司牒の天平勝宝4(752)年の項によると東大寺の封戸150戸が讃岐國に設置されたがそのうちの50戸が山田郡宮廻郷に置かれている。東大寺は鎮護国家のため各地に建立された国分寺の総国分寺である。始覚寺からは讃岐国分尼寺と同文の細弁16弁軒丸瓦が出土している。また讃岐国分寺からは同系等の細弁14弁軒丸瓦⁽¹⁷⁾(41)が出土している。このことから始覚寺は国分寺と関連の深い官寺的な寺院の可能性がある。『日本靈異記』によると讃岐國三木郡の話のなかで「三木寺」が登場するが、始覚寺を当てる考え方もある。奈良時代の官寺の総本山ともいえる東大寺の封戸が前田東・中村遺跡の地に置かれたことと、始覚寺と同文の軒丸瓦が前田

東・中村遺跡から出土したことから、決定的な遺構は検出されなかったが前田東・中村遺跡付近に寺が造営された可能性がある。7世紀後半にはⅠ類の瓦を伴う宝寿寺が築かれていたが、推測の域を出ないが東大寺の封戸が置かれた際に宝寿寺の瓦を葺き変えたか、宝寿寺が移動あるいは再建したものとは考えられないだろうか。そしてこの時に始覚寺からⅡ類とⅢ類の軒丸瓦が前田東・中村遺跡の地に持ち込まれ、新たに国分尼寺用の軒丸瓦が製作され、国分尼寺と始覚寺に供給されたものと考えたい。始覚寺の軒平瓦のうち藤原宮式の退化型式のものはこの時点で製作されたのではなかろうか。Ⅱ類とⅢ類ではⅢ類がやや先行する可能性があるがほぼ同時期と考えられ、始覚寺の創建瓦と考えられよう。そして前田東・中村遺跡に8世紀後半に移動したものと考えたい。東大寺=官寺と関連が深い寺院の間で瓦が移動し、また宝寿寺もこの時点で官寺的要素を持ったか、あるいはそのような寺院が新たに造営された可能性がある。前田東・中村遺跡のG区S R04では斎串をはじめとする多量の木製模造品が出土したが、これは律令制祭祀を反映しているものと思われ、上記したような寺（=公的施設）に伴う祓所に当たるものであろう。逆にこの祓所の存在から寺が想定出来よう。

（4）宝寿寺の寺域と前田東・中村遺跡

現在宝寿寺とされている場所は土壇と一部の礎石が残るのみで、その礎石は塔ではないかと思われる。伽藍配置は不明であり発掘調査も行われていない。ここでは限られた資料の中で宝寿寺の寺域の推定を試みたい。

この塔と思われる箇所の北側は急激に落ち込む谷状の地形になっており、北側に寺域が広がるとは考えられない。前田東・中村遺跡のC区とD区の境部分とこの塔跡の間に現地割りで方一町の平坦な部分がある。想像を逞しくするとこの部分に寺域が求められるかも知れない。そして塔が門の外側に出る伽藍配置となるのかもしれない。また二町四方とすると、前田東・中村遺跡のD区とE区の中央部分が寺域の南限となる。これは丁度F区からE区に派生する丘陵部のE区側の斜面部から平坦部に変換した部分に当たる。この推定寺域の南東部分にⅡ類とⅢ類の軒丸瓦と平瓦が集中して出土していることも示唆的である。しかしⅠ類の軒丸瓦は前田東・中村遺跡の東部のF区から集中的に出土している。F区の軒丸瓦集中地点のすぐ西側に平窯S F01が1基ある。この年代は7世紀後半と10世紀前半～11世紀末の年代推定に留まった。もし7世紀後半であればⅠ類の瓦を焼成した可能性が高く、宝寿寺に伴う瓦窯ということになる。F区のⅠ類の軒丸瓦は寺に直接伴うものでは



第816図 宝寿寺の推定寺域

なく、瓦窯に伴う可能性が高い。そしてF～G区は丘陵部と谷部にあたり寺の造営には向いていない。これまで採集されたI類の軒丸瓦は塔と思われる礎石がある堂床付近で出土していると言われている。また前田東・中村遺跡ではA区で奈良時代中頃の大型掘立柱建物群を検出している。寺の主要伽藍の建物ではないが、寺に関連する建物の可能性もある。

以上のことからI類に伴う寺、及びII・III類に伴う寺、これらは同一のものか否かは別として寺域を推定してみたい。地形はF区からE区にかけての丘陵部を除いて東から西へ向かって緩やかに下っている。寺域が求められるなら、南側は前田東・中村遺跡東部の丘陵部の西斜面の下、つまりE5区からA区にかけての部分が、北側は塔跡と思われる礎石の残る部分までと思われる。つまり前田東・中村遺跡のA区～E5区の北側部分と考えたい。

(5) おわりに

本稿では前田東・中村遺跡で軒丸瓦を含む多量の瓦が出土したことを契機に、その瓦の系譜と周辺寺院の検討を行った。今後の周辺の発掘調査による資料の蓄積により本稿の内容は当然修正されて行くであろう。高松平野東部では前田東・中村遺跡の北側の平尾古墳群を始め後期古墳も多い。古代寺院の造営につながる後期古墳の研究も今後この地域の研究にかかせない。本稿もそうした研究に一石を投ずるものとなれば幸いである。

註

(1) 軍守里廃寺の軒丸瓦に関しては次の文献によった。

森郁夫他『畿内と東国の瓦』京都国立博物館 1990

(2) 斎藤嘉造『越前国分寺推定遺跡 大虫廃寺・深草廃寺発掘調査報告』武生市教育委員会 1967

斎藤勝「大虫廃寺」『文化財調査報告』第21集 福井県文化財専門委員会 1971

(3) 中嶋隆他『大山廃寺発掘調査報告書』小牧市教育委員会 1979

大山廃寺の瓦の実見に際しては、小牧市教育委員会の中嶋隆氏に御世話になり御教示頂いた。

(4) 北條献示『東畠廃寺跡発掘調査報告書』稻沢市教育委員会 1980

北條献示『東畠廃寺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』稻沢市教育委員会 1990

北條献示『東畠廃寺跡発掘調査報告書(Ⅲ)』稻沢市教育委員会 1991

北條献示『東畠廃寺跡発掘調査報告書(Ⅳ)』稻沢市教育委員会 1992

北條献示『東畠廃寺跡発掘調査報告書(Ⅴ)』稻沢市教育委員会 1993

東畠廃寺の瓦の実見に際しては、稻沢市教育委員会の北條献示氏に御世話になり御教示頂いた。

(5) 服部哲也『尾張元興寺跡 第5次調査の概要』名古屋市教育委員会 1992

(6) 大村敬通・伊藤晃・阿久津久・福井英治『明石市高丘地区埋蔵文化財調査略報』兵庫県教育委員会 1968

(7) 稲垣晋也『飛鳥白鳳の古瓦』奈良国立博物館 1970

(8) 石尾政信「広隆寺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第5冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982

(9) 松尾忠幸『特別史跡 讃岐国分寺跡 昭和61年度発掘調査概報』国分寺町教育委員会 1987

- (10) a 『香川県史1』原始・古代 香川県 1988
b 『香川県史13』考古 香川県 1987
c 『三木町史』三木町 1988
d 安藤文良「讃岐古瓦図録」『文化財協会報』特別号8 香川県文化財保護協会
1967
e 安藤文良編『古瓦百選』美巧社 1974
f 稲垣晋也「南海道古瓦の系譜」『新修国分寺の研究』第5巻上 南海道 吉川
弘文館 1987
- (11) (10) a, b, d, f
- (12) (10) a, b, c, d, e, f
- (13) (10) a, b, d, e, f
- (14) 伊藤裕偉・佐藤竜馬「高松市滝本神社古墳の測量調査」『香川考古』第2号 1993
- (15) 水野正好「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋賀県文化財調査報告書』
第4冊 滋賀県教育委員会 1969
- (16) 渡部明夫・羽床正明「国分尼寺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』昭和55年度
香川県教育委員会 1981
- (17) 松尾忠幸『特別史跡 讃岐国分寺跡 昭和60年度発掘調査概報』国分寺町教育委員
会 1986

遺物出典

- 16・17 (10) d 文献
18・19・20・23・37 (10) b 文献
21・22・24・25・26・34・35・36・38・39 (10) c 文献
27~29 (8) 文献
30~32 (4) 文献
33 (3) 文献
40 (9) 文献
41 (17) 文献
42・43 (16) 文献